沿岸「朝市」の現状分析と地域資源としての可能性

ANALYSIS OF CURRENT MORNING MARKET AND AVAILABILITY OF REGIONAL RESOURCE IN COASTAL AREA

森本剣太郎[1]・鈴木　武[1]
Kentaro MORIMOTO, Takeshi SUZUKI

[1]正会員　博(工)　国土交通省　国土技術政策総合研究所（〒239-0826 神奈川県横須賀市長瀬3-1-1）

The local economy in Japan is hoping for the immediate regional promotion plan to revitalize the local economy because of its deterioration. There is the increasing momentum toward food security or local production for local consumption and "regional gourmet food" has been noticed a measures of regional resource. Thus, we suggest "Morning Market" as one of a method for the local revitalization. The current research deals with examine of the current morning market and its consideration with the field investigation and the literature research. As a result, current morning market is mainly held on Sunday and its characteristics of the location and item goods, etc.

Key Words : *Morning Market, Coastal Area, Regional Resource, Local Revitalization, Local Production for Local Consumption*

1．はじめに

2006年の夕張市の財政破綻を代表するように，わが国の地方自治体の財政は非常に厳しい状況にある．地方・地域では，国内外の経済停滞に加えて，急速な少子高齢化の進行や若年層の流出も相まって，地域活力やにぎわいが低下しており，早急な魅力ある地域振興策が望まれている．特に水産業は，漁獲高の減少，大型小売店の台頭や流通構造の変化，国内水産消費量の縮小，燃料や水産資材の価格高騰など幾多の要因が重なって，漁労所得の低水準や漁協営業収支の赤字化など深刻な状況に陥っている．わが国の豊かな魚食文化を継承するためにも，沿岸地域の活性，水産業の再生は非常に重要な課題である．

また2000年以降，わが国では食品偽装事件やBSE問題など食に関する問題が相次ぎ，国民の「食の安全・安心」の機運が高まり，地産地消，産地直売所，朝市などが注目され始めた．さらに人々の興味は，ご当地グルメ，B級グルメなどの「地域食」にもおよび，今日では様々なイベントが催されている．

そこで本研究では，高度経済成長とともに衰退すると思われた原初市場形態の朝市が，今も残存し，むしろ増え続けていることに注目し，朝市を地域活性化，賑わいある町づくり，地産地消の促進に向けた一方策として考えた．

朝市・定期市に関する研究は，20世紀初頭からこれまでに人文地理学者，経済史家，文化人類学者らを中心に，定期市の発生起源，類似性，市の機能や役割などについて先行研究されてきた（例えば，石原，1987；中島，1977など）．しかし，今日では朝市を地域興しの一手法として設定し，朝市の賑わいの評価，空間や問題の構造解明，経済効果や消費行動の解明などへと研究目的が変化してきた．例えば，河合ら（2007）は，定期市の出店者と消費者の発話と対話に着目し，定期市固有の特徴とさらなる賑わい創出について考察した．折田ら（1995）は定期市の問題点を抽出し，DEMATEL法により構造化を試み問題点の定性・定量化を図った．氏原ら（2007）は，朝市の買い物行動はレジャー・観光的要素が強いと判断し，家族や友人・知人のグループ行動に着目した踏査・分析を行っている．しかし，賑わい創出を目的とした朝市・定期市の研究事例は未だ少なく，特に水産物を主要出品物とする沿岸「朝市」の研究事例は著者が知る限り日高（2002）だけである．

そこで本研究は地域振興策として朝市に注目し，現地踏査および文献調査により現状の朝市を把握するとともに，朝市が地域資源として沿岸地域に及ぼす影響について考える．

2．朝市の定義と調査･分析方法

(1) 朝市とは

昨今，呼ばれている「朝市」とは，決められた市

日の早朝から午前中の短時間内に，個々の店主が生産物や加工品などを一箇所に持ち寄り取引する市のことを指し，元々は定期市から派生したものである．定期市とは，石原（1987）によると「週や旬など比較的短い周期で開かれる市であり，世界の主要文化圏を成す諸地域には，必ずと言っていいほど定期市が現存するか，もしくは少なくとも過去において存在していた」とされる．**表-1**は，石原が要約した定期市の定義と分類に，著者が追筆・整理した一覧であり，市日の頻度や周期によって分類される．表より，今日の人々にとって馴染みのある定期市は，祭り・縁日として地域の名風物と知られる大市（おおいち），主に土曜日，日曜日に生産地で開催される曜日市，輪島朝市や飛騨高山朝市などに代表される観光朝市や築地などの卸市場の一角で一般の人々も流通物を購入できる毎日市があげられる．他にも，新潟県，秋田県，三河地方や外房地域など一部の地方地域では，昔からの慣例にならった六斎市や十二斎市が地域生活に脈々と根づいている．ここで，六斎市とは月に6回開かれる定期市を指し，愛知県「田原2・7市」や千葉県「茂原（昌平町）の六斎市」のように地域名に市日や開催頻度を組み合わせて呼ばれることが多く，「2・7市」の市日は毎月2と7のつく日の2, 7, 12, 17, 22, 27日である．

(2) 調査・分析方法

本研究は，**表-2** に示すように現地踏査と文献調査より構成される．現地踏査は，朝市の立地環境，施設の有無，店舗配置，出品物，客層，趣き，組織組合などの開市環境や利用実態を踏査するとともに，来市した消費者と出店者に対するアンケート調査を実施した．研究対象の朝市選定は，沿岸域で通年に渡って開催され，当該地域において比較的知名度の高いと考えられる神奈川県の「金田湾朝市」，長崎県の「佐世保朝市」，佐賀県の「呼子朝市」，千葉県の「勝浦朝市」と「御宿朝市」の5つとした．調査日程は，各朝市につき週末1日と平日1日の計2日間とし，2009年3月22日～4月19日に実施した．なお，金田湾朝市は日曜市，佐世保朝市・呼子朝市・勝浦朝市は毎日市，御宿朝市は六斎市である．

しかし現地踏査した5つの朝市は，歴史深く，出店店舗数の多い中規模～大規模に相当し，また一部の朝市は観光的性格を持つなど，その独自性が強いと思われた．そこで文献調査では，その地域の日常生活にとけ込んでいる小規模の朝市を考慮して，沿岸域に限らず数多くの朝市が開催されている都道府県を一般書籍やWeb上で掲載されている情報内容から判断し，**表-2** に示す7県289朝市を選定した．収集した朝市情報は，市日時，立地場所の特性，出店数，出品物，駐車場など基本情報である．

本研究では，朝市を以下のように定義し情報収集を行った（ただし，全てを満たす必要はない）．

①早朝など午前中の限られた短時間に営業する，もしくは午前中から開市する市．

表-1 定期市の定義と分類（石原，1987を追筆・整理）

市の名称	説明
毎日市	毎日開かれる市
定期市	比較的短い周期(5日～10日程度)で開かれる市
三斎市	月に3回，10日おきに開催される市　ex.4のつく日
六斎市	月に6回，5日程度おきに開催される市　ex.2,7のつく日
九斎市	月に9回，3,4日おきに開催される市　ex.2,5,9のつく日
十二斎市	月に12回，2.5日程度おきに開催される市　ex.2,5,7,10のつく日
週市・曜日市	7日週を周期とする定期市　ex.土曜市，日曜市
大市	長い周期(数ヶ月や1年など)で開かれる市　ex.朝顔市，ほおづき市

表-2 調査内容（現地踏査と文献調査）

調査	調査対象	調査内容および項目	
現地踏査	金田湾朝市(神奈川) 佐世保朝市(長崎) 呼子朝市(佐賀) 勝浦朝市(千葉) 御宿朝市(千葉)	現状確認	店舗・施設配置，写真撮影，朝市の歴史，組織組
		アンケート調査（消費者）	属性，交通手段，来市目的，購入品目や購入金額など計13問
		アンケート調査（出店者）	属性，交通手段，出店理由，長所短所，スケジュールなど計17問
文献調査	神奈川県(49朝市) 愛知県(83朝市) 福岡県(14朝市) 石川県(28朝市) 富山県(35朝市) 福井県(32朝市) 新潟県(48朝市) 計289朝市を対象	開市日(周期)，開市期間(月)，開市時間，場所の土地や施設所有者・場所・環境，駐車場，開市年，出店数，客数，出品目(主・副)	

②大市のように年に1回程度の開催頻度でなく，少なくとも月に1回以上開催される市．

③産地直売所のような専用建物を持たず，露天に近い状況で営業する市．

④産地直売所のように生産者が代表者に商品販売を委託する，無人販売所のように販売員が常時店頭に立たないなどの営業形態でなく，店主自ら開店から閉店まで販売を行う．

⑤1店舗でなく，複数の店舗が出店する市．

本編では，主に文献調査より得た成果を述べ，所どころ現地踏査より得た所見を合わせて分析・考察を行う．なお，本調査の詳細は森本ら（2010）で報告している．

3．朝市の現状分析

(1) 朝市の開催日時および期間

図-1 は文献調査より得た市日を整理した結果である．神奈川県，福岡県，石川県，富山県，福井県は「日曜市」がそれぞれ50%以上を占め，次に「土曜市」が続いており「週末市」が普及している．日曜日は市場，農協や漁協が運営していないことが多く，生産者は商品を出荷する必要がなく時間的余裕があることや，多くの消費者にとって日曜日は休日にあたり朝市に出かけやすいなどの理由により，日曜市に偏っていると考えられる．

一方，愛知県と新潟県は，「六斎市」が61%，79%を占める結果となった．両県は昔から数多くの六斎市が開かれ（石原，1987；中島，1977），今も地域生活と密接に関わっている．現地踏査した六斎市の御宿朝市（2・7のつく日）では，曜日にかか

わらず消費者の入込状況に変化はなく，市日の5日周期と社会経済活動の7日周期の異なる周期に消費者の不便さを感じることはなく，次の市日が待ち遠しい回答を多く得た．

図-2 は，一年を通した朝市の開市期間を月別に整理した結果である．各県における開市期間を月平均に換算すると神奈川県は 11.47 ヶ月，愛知県は 11.98 ヶ月，福岡県は 10.57 ヶ月，石川県は 9.18 ヶ月，富山県は 6.97 ヶ月，福井県は 8.75 ヶ月，新潟県は 11.19 ヶ月である．神奈川県，福岡県，新潟県の多くの朝市が通年に渡って開催しているが，一部では冬季や夏季に開市していない朝市もある．冬季は，漁港では時化が頻発するため出漁できないこと，農村地帯では低気温による集客力の低下や積雪にともなう収穫物の減少が理由としてあげられる．夏季は，強い日差しに鮮魚や野菜の鮮度を保ちにくいことや沿岸域の店主は海水浴客などの行楽業に忙しいためである．愛知県の開市期間の月平均は 11.97 ヶ月であり，一ヶ所の朝市を除き全ての朝市が通年に渡って開市していた．北陸3県は，先の3県と比較して明らかに開市期間が春～秋に限られており，冬季の厳しい実情が伺える．ただし，石川県は朝市専用建物や集荷場などの屋根設備の整った場所で営業する朝市が含まれていたため，富山県や福井県よりも開市期間が長い結果となった．一方，北陸3県と同様に日本海側気候であり隣接する新潟県は，開市期間が北陸3県よりも顕著に長い．この理由は，新潟県は六斎市を多数含んでいるためだと考える．六斎市は近隣の地区や町で市日をずらして別の六斎市が立つことが多く，**図-3** に示すように外房地域では毎日どこかで六斎市が興る状況にある．このため六斎市には，複数の市に出店し生計を立てる，いわゆる「行商」が生産者店主に混じって出店している．御宿朝市は約 25 店舗が店を構えるが，その約半数が生産者の店主であり，残りの店主は複数の六斎市に出店する行商（卸し・仲買・小売）であり，うち2名は毎日六斎市に出店していた．現地踏査した金田湾朝市を除く4つの朝市では，生産者店主と卸し・仲買店主が共存していた．生産者は種類と量に限りがあるものの安価で生産物を販売し，卸し・仲買は安定的に多種多量の商品を提供し差別化されている．また，収穫物の少ない季節や雨天時は，生産者は卸し・仲買と比較して出店率が低い傾向にあり，朝市を継続的に開催するのであれば生産者に限らず，多業態の出店が望まれる．

図-4 は，朝市の営業時間を調べた結果である．平均営業時間は，神奈川県が 2.4 時間，愛知県が 3.7 時間，福岡県が 3.6 時間，石川県が 2.7 時間，富山県が 2.3 時間，福井県が 2.6 時間，新潟県が 5.8 時間であった．また，営業時間のピークは神奈川県，福岡県と石川県は7時，富山県と福井県は8時，新潟県が9時，愛知県は10時であった．愛知県と新潟県は他の5県と比べて営業時間が長く，開市開始時間が遅い．これは愛知県と新潟県は伝統的

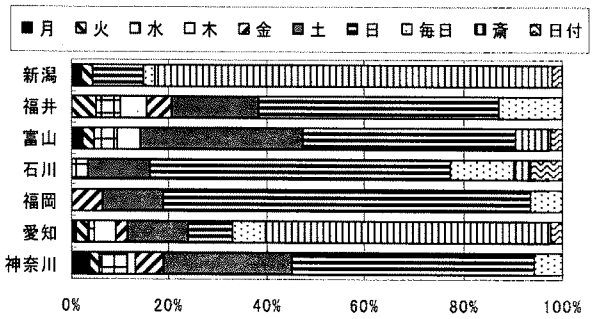

図-1 朝市の開催日

※「月」～「日」は曜日市，「毎日」は週に5回以上開催される毎日市，「斎」は三斎市と六斎市，「日付」は月に2回以下開催される市とする．

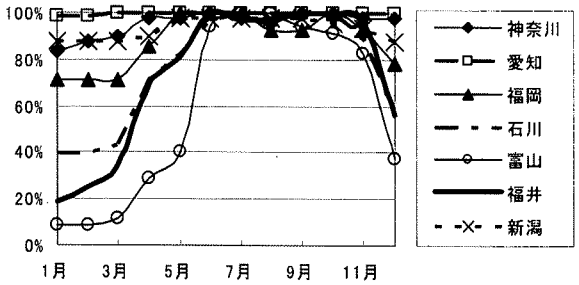

図-2 朝市の一年を通した開市期間（月）

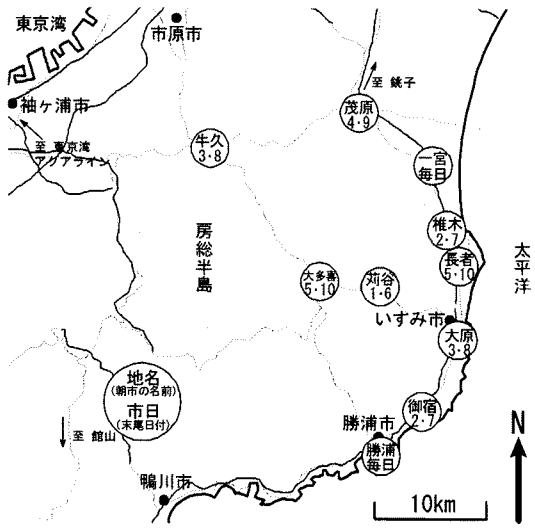

図-3 外房地域の六斎市の開催地と市日

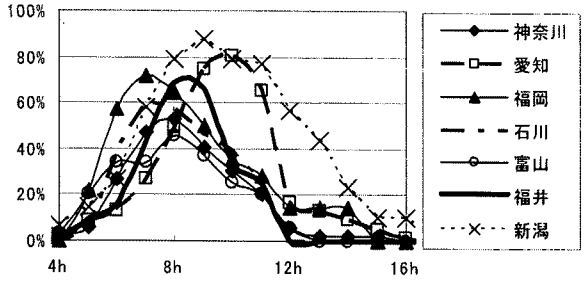

図-4 朝市の営業時間

な六斎市，他5県は週末市を多く含くんでいることが影響していると考える．六斎市の多くは，もともと正規の露天市場であり，その営業時間は9～15時程度であったため，今もその名残が残っていると推測される．別途，主要取り扱い品目を鮮魚と野菜で分けて開市時間を整理すると，鮮魚が 6～9 時であるのに対し，野菜は7～11時であった．鮮魚が早朝の短時間の朝市で開かれている理由は，日常の漁労は早朝に行われていることや魚介類の鮮度を維持しやすいためだと考える．ただ，多くの「漁港・海岸」や一部の朝市では，閉市時間よりも商品が先に売り切れてしまい早く朝市を閉じることもあり，漁港朝市の営業時間はもっと短い可能性もある．

(2) 朝市の立地環境

図-5は，朝市の立地場所を整理した結果である．神奈川県は「漁港・海岸」，「公園・広場」，「農協」での立地が多く，逆に「神社・寺」や「道路」での営業は一切みられない．これに対し愛知県は「神社・寺」と「農協」の開催が最も多く，次いで「道路」であった．福岡県は，「漁港・海岸」が半数を占めている．福岡県は産地直売所の販売形態数が朝市よりも上回っているが，主要取り扱い品目を鮮魚に限れば「漁港・海岸」の朝市に偏っている．北陸3県は「農協」や「役場・公共施設」の占める割合が高く，農協や行政の支援を受けている．新潟は「道路」が65%と過半数を超え，次いで「役場・公共施設」であり，逆に「道路」の立地が非常に少ない．古来の定期市は，人の往来が絶えない主要幹線道路やその分岐点，また人がよく集まる神社・寺で開催されていたとされ，同じく六斎市の多い愛知県とは若干異なり，この理由は分からない．

以上より，朝市の多くは「農協」「漁港・海岸」「役場・公共施設」「道路」「神社・寺」で開かれていた．これらは朝市のための空間・場所でなく，本来はそれぞれの役割を果たし，ある一定時間だけは朝市として利用されている．つまり朝市は，開催場所・施設の主要目的を阻害しない・しにくい日時に時限付きで開市され「一つの空間で二つの機能」の特性を持つ．ただし「道路」での朝市開催は，現在では交通安全の観点から厳しく制限され新たな朝市の誕生は難しいが，古来より継承される朝市は地域生活になくてはならず開市を認められている．

図-6は，開市環境を集計した結果である．神奈川県は「青空」が半数以上を占め，他県と比較しても群を抜く．これは駐車場や公園・広場などの公共オープンスペースにおいて「青空」の下で多く運営されているためである．一方，愛知県と新潟県は「仮設テント」がそれぞれ50%と80%を超え，次いで「屋根あり」や「軒下」など雨や日差しを塞ぐ屋根設備が整っていた．福岡県は，集荷場・選別所・プロムナードなどの屋根設備が整っている「屋根あり」が最も多く，一方「青空」での開催が少ない．北陸3県は「青空」の占める割合が高いが，石川県

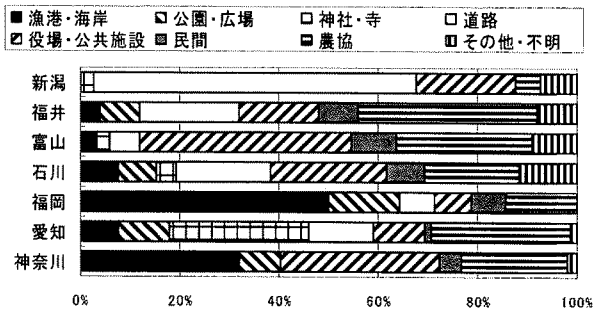

図-5 朝市の立地場所

※「漁港・海岸」は漁港が多数を占めるが砂浜海岸，港湾，マリーナも含まれている．「役場・公共施設」とは役場，市民センター，市民ホール，福祉センターや公民館などの駐車場や屋外の空きスペースを指し，「農協」の多くは農協施設の駐車場や空きスペースがほとんどであり，僅かであるがAコープの駐車場やインショップ，道の駅も含まれている．

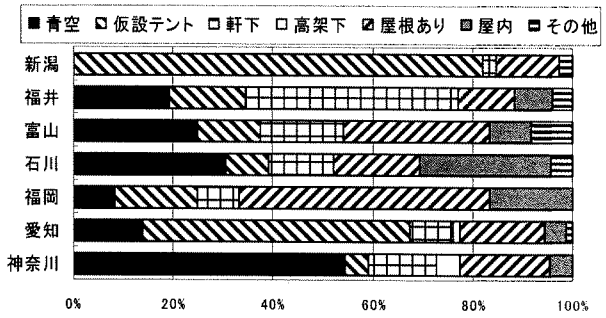

図-6 朝市の開市環境

※「屋根あり」とは集積・選別所，固定テント，プロムナード，アーケードであり，「屋内」は朝市専用建物，インショップ，小屋・倉庫を指す．

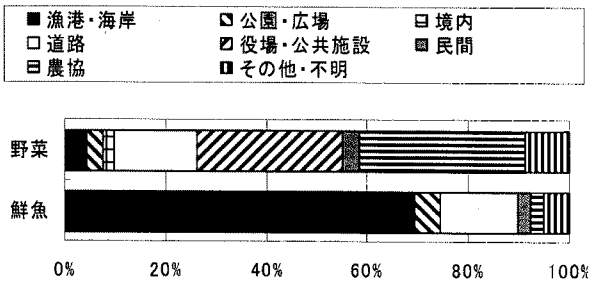

図-7 主要取り扱い品目別の立地場所

※項目は図-5と同様である．

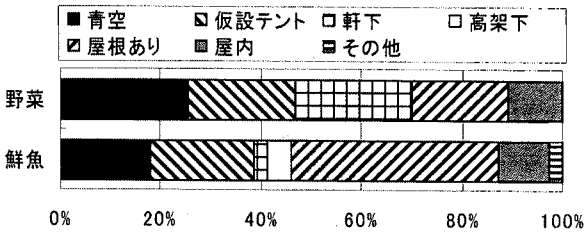

図-8 主要取り扱い品目別の開市環境

※項目は図-6と同様である．

は朝市専用建物や朝市会場と倉庫を兼用した「屋内」がやや含まれている．以上より，朝市は専用の建物を必要とせず，青空や仮設テントなどの露天タイプと，軒下，高架下，集荷・選別所などの既存施設の屋根を有効利用するタイプに分かれていた．

(3) 取り扱い品目別や六斎市・曜日市の特性

図-7と**図-8**は，主要取り扱い品目を鮮魚と野菜に分けた場合の立地場所と開市環境の結果である．鮮魚は「漁港・海岸」で開かれている朝市が70%を占め，その開市環境は集荷場・選別所が大半を占める「屋根あり」の42%である．漁港朝市では，漁獲した魚介類を漁船の船倉や船上生簀に入れた状態で岸壁に横付けし，すぐそばの屋根の付いた集荷場・選別所や荷揚げした露天の岸壁で生きた・新鮮なうちに消費者へ提供していた．一方，野菜を主要とする朝市の立地場所は，「農協」が33%，「役場・公共施設」が29%，「道路」が16%であり，開市環境は「青空」が24%，「軒下」が22%，「仮設テント」が21%であった．つまり，鮮魚を主要取り扱い品目とする朝市は海から陸上へ荷揚げする境界線で行われ，鮮度を維持した「船倉から消費者のもとへ」の流れであるのに対し，野菜は広い空間を有し，人が集いやすい立地条件「広さと集客力」がキーワードだと考える．

図-9，**10**は，六斎市と曜日市別の立地場所と開市環境の結果である．図より，六斎市は「道路」や「神社・寺」の境内で「仮設テント」を使用しているのに対し，曜日市は「農協」「役場・紅葉施設」「漁港・海岸」の立地場所で「青空」，集荷場・選別所などの「屋根あり」，建物の「軒下」の専用施設を持たず露天や既存施設を利用していた．六斎市への出店者には，朝市で生計を立てる行商店主が含まれるため，同じ規格の仮設テントを個々で購入し，商品と一緒に自動車で運搬し，設営していた．

最近の朝市は曜日市，特に週末市が多いことを述べたが六歳市にも利点がある．多くの人々にとって週末は休日であり，ゆっくりと朝を過ごす人や旅行に出かけて住まいを離れる人もいる．朝食前後に朝市が近所で開かれるのであれば，平日と週末の両方に興る六斎市は常連客さえ定着すれば安定した営業が見込まれ，特に朝市が隣接して興るような状況下であれば差別化できる．金田湾朝市から自動車で10分の位置に三崎朝市も日曜日に開かれ，それぞれの営業時間は金田湾朝市が6～8時，三崎朝市が5～9時と同じ時間帯であるが共存している．金田湾朝市は漁業組合が主体となって運営し，出品者の2/3は漁民で残りは地元の野菜，豆腐，生花らの生産者であるのに対し，三崎朝市は問屋・仲買が組合を結成し出品物も多種多量である．また主な客層も異なり，前者が地元住民，後者は遠方客や観光客と分かれており，隣り合う両者は差別化することで消費者の選択肢を増やし支持を得ている．消費者の一部には両方の朝市を訪れ，それぞれの朝市特徴を最大限生かして商品を購入するなど工夫している．

図-11は，**図-1,2,4,5,6,7,8**で示した数値をもとに数量化Ⅲ類を行った結果である．図の横軸が1軸，縦軸が2軸であり，これまでに考察した内容をある程度表現している．Aグループの朝市は漁港・海岸で開かれる朝市であり，屋根付きの集荷場で，鮮魚を主に販売し，9時前には閉市する結果となっている．しかし三河地方の漁港朝市は毎日市であり，また水揚げ，セリと朝市が同時に行われているため2時間以上朝市が営業されており，この事象が図に反映されている．Bグループは六斎市の特徴である平日と週末が混合する市日，通年に渡る開市期間，長時間で9時前後以降に営業が開始される開市スケジュール，境内や道路の立地場所，仮設テントを用いた開市環境が図中に揃っている．Cグループは主品目を野菜とする内陸に多い残りの朝市群である．

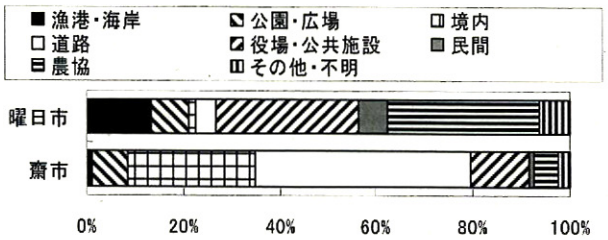

図-9 六斎市と曜日市の立地場所
※項目は図-5と同様である．

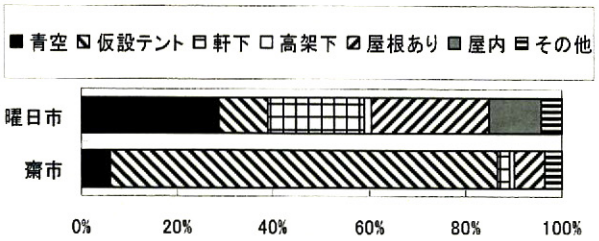

図-10 六斎市と曜日市の開市環境
※項目は図-6と同様である．

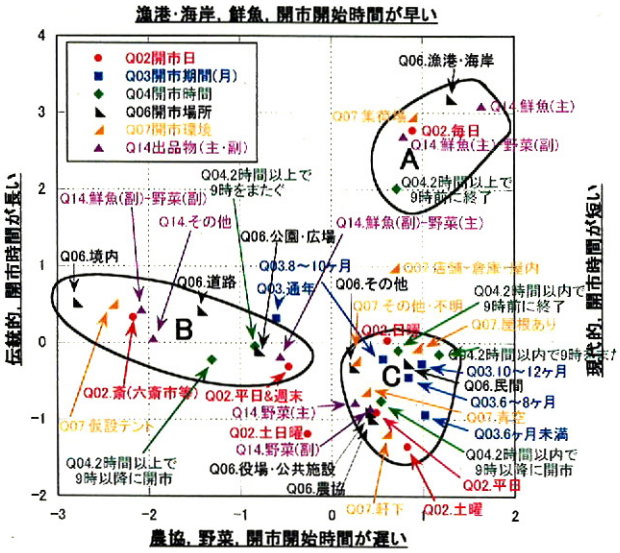

図-11 数量化Ⅲ類による開市時間・環境・状況など

4．沿岸域の活性化に向けた議論

漁港・港湾港・海岸の沿岸で開催される朝市であれば，消費者は新鮮な魚介類が提供されることを期待する．そこで漁港朝市の所見を考えると，①漁船が接岸できる．②魚介類の水揚げ，選別が朝市販売と同じ場所であり，かつ雨水や日差しを防ぐ屋根が付いている．③ほとんどの漁港敷地内には大型製氷機を有し，朝市営業中も鮮度維持のため大量の氷を使用できる．④朝市を訪れる消費者の中には，クラーボックスや発泡スチロールなどの保冷箱やカバンの代わりにバケツを準備するなど消費者の購買意欲は高く，また固定客として定着していた．⑤商品の流通経路は「船倉から消費者のもとへ」の流れになっており，消費者は生きた・新鮮な魚介類を購入している．また消費者アンケートの結果では，地域にもよるが自動車で 20～30 分以内の距離であれば，消費者は新鮮で安価な地元魚介類を求めて，月に複数回は訪れていた，など漁港朝市独自の特性や客層が存在している．しかし，多くの漁港背後には大きな消費地を抱えることは少なく，むしろ港湾背後に広がっている．港湾は，その背後に産業や社会が形成し，地域の中心へと成長させ（長尾，1989），さらに広い公園・広場や駐車場を有するなど朝市開催条件が整っている．魚介類を満載した漁船の港湾内での離接岸や氷のうの問題などを解決すれば，消費者が訪れやすい魅力的な朝市が誕生すると思われる．

漁港朝市に並ぶ特徴ある商品として，比較的扱いやすいアサリ・カキなどの二枚貝，サザエ・アワビ等の巻貝，ウニがある．例え，これらを 2,3 時間空気中にさらして店頭で陳列しても耐性を持っており，消費者が安心して持ち帰ることができ，また売れ残っても海水に浸け直し養生することもできる．また，定置網などの漁具に付着するムラサキイガイや小型のワカメ，仕掛けにかかった雑魚などの流通販売が難しい商品も販売することができる．

ただし，食品衛生の観点からすると朝市での鮮魚の扱いは厳しい．例えば，鮮魚を解体せず一本売りであれば食品衛生上問題はないが，屋外で生モノを切り分ける・刺身に加工して販売することは禁じられている（保健所に届けられた仕込み場で加工するのであれば，切り分けやパック詰めは問題ない）．大型魚を売りさばくためには一本売りしか方法はなく，他の商品と抱き合わせて販売するなどの工夫が取られていた．もちろん仕込み場を用意することも考えられるが，福岡県のように鮮魚を主要取り扱い品とする場合は，施設の維持管理費や使用時間の短さを考慮すると産地直売所で販売するよりも朝市の方が合理的だと思われる．朝市は，捕れたての魚介類という品質が短時間の完売を可能にしていることと，時化など天候に左右されやすく商品の安定供給に事欠くことが多いため，本論で示したように既存施設の積極的な利用が図られていたと考える．

5．おわりに

本研究は，現地踏査と文献調査により現状の朝市について分析・考察した．その結果，朝市は①毎日や通年に渡って開催する必要なく，地域環境に併せて開市される．②市日は，古来の慣行に従った六斎市と現在の社会経済活動の 7 日周期の二つがある．③簡易施設による営業が可能である．④朝市の時限性を最大限利用し，1 施設空間で 2 機能を発揮することができるが，朝市はあくまで副機能である．⑤間引いた生産物，季節性野草，規格外の品質・サイズ，数量が一定量揃わない，マイナーな・試験段階の生産物など，一般流通にそぐわない商品も販売できる．⑥朝市の出店者は，生産者，卸し・仲買い，小売りなど多業種に至っていた，など多数の知見を得た．他にも⑦朝市は結成され組合が朝市を運営し，場所や施設を管理する者は場所の使用許可を与えていることも得た．また，沿岸域活性に向けた朝市の方策として，①広大な公共スペースを有する港湾の積極的な活用，②管理がしやすい魚介類の紹介，③食品衛生面からの留意点などを述べた．

最後に新鮮な魚介類は，幾らばかりかアクセスが悪かろうとも，多くの地域住民を惹きつけ，固定客として定着していることは，データからも現場の雰囲気からも感じることができた．朝市が，消費地に近く，広いスペースや駐車場を有する港湾や海浜公園で，その本来の主機能に影響を及ぼしにくい早朝の時間内で開催できるのであれば，十分地域に密接した振興策となるものと思う．

謝辞：本研究を進めるにあたり，金田湾朝市，佐世保朝市，呼子朝市，勝浦朝市，御宿朝市の関係各位の余りあるご厚意を頂いた．ここに謝意を表します．

参考文献

1) 石原　潤（1987）：定期市の研究－機能と構造－，名古屋大学出版会，pp. 1-54.
2) 氏原岳人，谷口　守，松中亮治（2007）：グループに着目した朝市来訪者の行動特性と環境影響，土木学会論文集 D，Vol. 63　No. 1，pp. 55-64.
3) 河合克俊，村上修一（2007）：定期市における来場者の発話と対話の特徴についての研究－中心市街地におけるにぎわいの再生に向けて－，日本都市計画学会，都市計画報告集，No. 6，pp. 78-83.
4) 長尾義三（1989）：沿岸域と港湾空間利用計画手法の展望，土木学会論文集，第 401 号/Ⅳ-10，pp. 1-12.
5) 中島義一（1977）：三河の定期市，駒澤地理，Vol. 13，pp. 35-45.
6) 日高　健（2002）：都市と漁業－沿岸域利用と交流－，成山堂，pp. 95-118.
7) 森本剣太郎，鈴木　武（2010）：朝市の現状基礎分析—沿岸域の地域活性化に向けて—，国土交通省　国土技術政策総合研究所，国土技術政策総合研究所資料，No. 559.